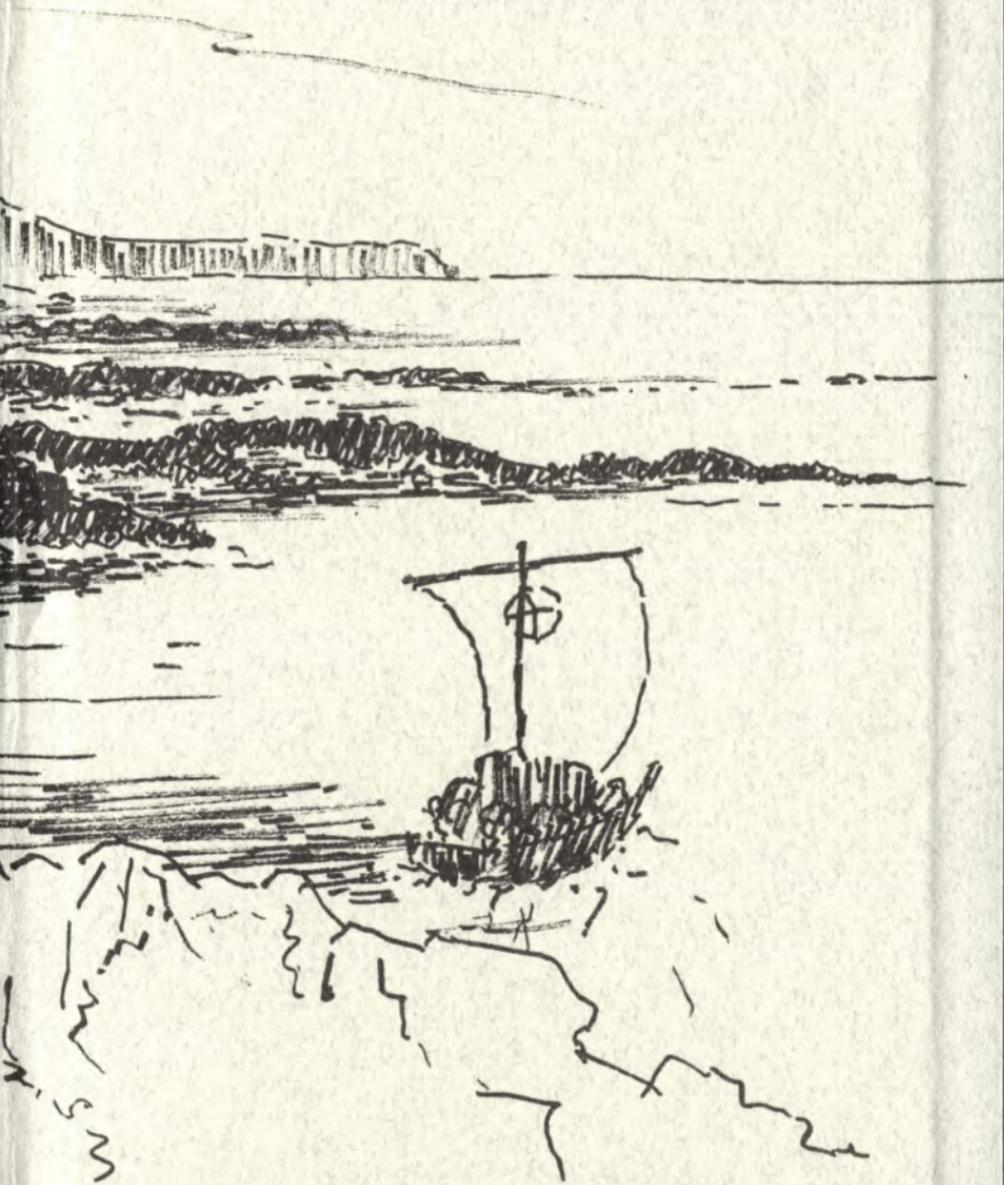


美人伝







紀伊國

密村船

青樹



川柳
句集

美人社

大矢十郎の世界

川柳塔社
刊



(著者近影)

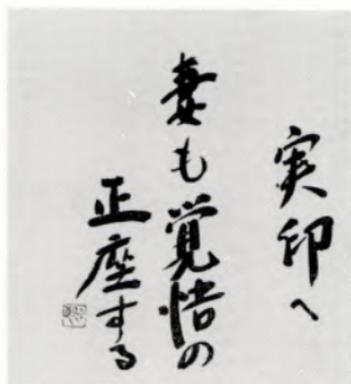


髪振って世はバラ色の口答え

A vertical calligraphy piece on a light background. The text is written in black ink. The main text is '髪振って世はバラ色の口答え' (Shaking hair, the world is a pinkish-red answer). A small red seal is visible at the bottom left.

婚姻届処女と書く欄見当らず

A vertical calligraphy piece on a light background. The text is written in black ink. The main text is '婚姻届処女と書く欄見当らず' (In the marriage license, the virginity section is not as expected). A small red seal is visible at the bottom left.



若き日の十郎、まさ子（昭和27年元旦）

握手など

知らない母の
低い腰

ダムの水抱かへれて山臍に落ちず

ここ近所が何を指折る岩田帯



(昭和47年元旦)

まさ子
 五女、みち子
 四女、裕子
 十郎
 長男、喜一
 長女、富子
 三女、栄子
 次女、とよ子

淋しみに柳詠雨して暮水の白

人はみな人ごととなりし 齢に遭う



(昭和57年10月7日) 58才誕生日



長女、富子

長男、喜一

次女、とよ子

三女、栄子

四女、裕子

五女、みち子

四女裕子挙式の日～順々に嫁く…～

(昭和58年10月23日)

序

西
尾

栞

昔、紀伊国屋文左衛門は、みかん船を江戸に出して名をあげたがこの度、新宮の人、川柳「みかん」を主宰する大矢十郎さんが、孝子一男五女より、還暦のお祝いを受けて、川柳句集「みかん船」を出版されることになった。

還暦で既に九人のお孫さんをもたれる十郎さんは、六人の子女を神さんより授かった子福者で、句集みかん船を繙くや

寝たふりで聞けば妻娘は父思い

妻と子の話の外にいる平和

灯油切れかかる補給へジャンケンポン

と温かい家庭の人であり、何とも言えぬ体温を感じる

夫婦対夫婦で和む松の内

妻が言う席へ座って目出度い日

を読む時、十郎さん御夫婦に、六人の子女御夫婦と九人のお孫さんで計二十二人の家の子郎党のお正月の見事さ、和やかさ、賑やかさは、手にとるようで羨ましい限りである。

こんな平和な、こんな温かい生活をしておられる、十郎さんの句

に愚かな句はなく、

銭湯で逢う警官は怖くなし

税務署が少し笑えば倍笑い

つましく生きて旗日は旗を出し

良い知恵はないかとうまい頼みよう

と微笑を禁じ得ない句に出会う。

又曾て、路郎賞を獲得された名句

順々に嫁くそれだけを羨まれ

等、六人の子女の結婚に謙虚な、お心の美徳の現れが出ているのに
萬歳を叫びたい。

最近の川柳は深刻な、額に皺を寄せた文学とは、と言うような銜
い気の多い句の中に、淡々として

神主でさえも神様には逢えず

うかつにも覗きに立てば自動ドア

古々米や三年前の田植唄

クレーラーの部屋で工事の指図受け

浮動票選挙事務所がよく食べる

金で済まぬ金で済まぬが金で済み

そんな事されては嬉し袖の下

奥さんも子もいる前で貸してくれ

儲けてるらしいと仇のように言う

向こうでも受話器を包む深い仲

歯の話すれば聞かずに聞かされる

赤札で買った差額は寿司を食べ

数えればきりがないのでやめるが、ニンマリと浮かぶユーモア、穿ち得たる妙、省略の巧みな言葉、さながら昭和の柳多留を読むようで、思わず時間の経つのを忘れる好句集である。

再び言う、昭和の柳多留の手本とこそと声を大にして叫ぶとも過言でないことを。

十年後の古稀の祝の第二句集には、又素晴らしい名句佳吟を見せていただくのを楽しみに、ペンを措く。

十郎さんご幸福な人よ、お人柄よ、お目出度う。

甲子 桃の節句の日

水鶏庵

にて

葉
識

序

橘
高
薰
風

大矢十郎さんと私との出会いは、

吊皮を交替させぬエメラルド

の一句で、それは、昭和四十七年一月二十二日の電波土曜歌壇、川柳の部に掲載された。その後

真実はソロバンに手が触れるまで

メーデーの目に羨まれ蔑まれ

巻尺へ蛙心配顔でいる

おふくろは相手にもあり優勝戦

出前箱リーチを教授して帰り

など、続続と佳句を寄せ、電波柳壇の基礎固めに力を貸して頂いた。はじめてお目にかかったのは、翌年の三月、新宮の「みかん」と八尾の「菜の花」合同の吟行会だった。その日の様子は、NHKのテレビニュース「早春の瀬峡にぎわう」で放映されたこととて、今に思い出鮮やかだ。

札所から聞きあきぬもの滝の音

宴会慣れしているらしい芸達者

十郎

まさ子

集合へまだ去り難い滝しぶき

喜一

嘘のない流れの中の静の青

大輪

コチコチになつて飲めない者の芸

富子

と、ご一家大挙して歓迎して下さった。

このたび、還暦を迎えられる十郎さんを祝い、句集をご一家で上梓されることになった。

昭和五十六年、第十六回の路郎賞を受賞された句が、

順々に嫁くそれだけを羨まれ

というのであつたことから推察出来るが、十郎さんは、一男五女の子福者である。

寝たふりで聞けば妻娘は父思い

さつきから起きてた顔で妻が起き

久しぶり孫はさほどに思うてず

盃は面倒という婿二人

十郎作品の一つの面は情で、ここには温かい家庭川柳、ほのぼの川柳が繰り広げられる。だが、一転すれば辛辣な批判精神の持ち主で

恐ろしい顔にこにこと選挙ピラ

白旗が一番安い防衛費

安売りの字は下手なほど安く見え

雑巾がかわいて愛の破局くる

達筆にやや責任もあり誤植

と、これらは知の一面を存分に發揮する。

そして、全体を通して、十郎作品の底に流れているのは、常にユーモアの味なのである。

それは、十郎さんの人柄であり、生きざまの余裕であるのだが、芸にとつて人（にん）が何より大切であるように、川柳人として、うってつけの得難い素質だと言える。

十郎さんからの書信に、西尾棗主幹とあなたに序文執筆の快諾を得て、大船に乗った気分できるとの文面があり、その末尾に、句集は「みかん船」と命名するとあった。

巧まざるユーモアかくの如し。蜜柑船のすばらしい船出を待つこと、切なるものがある。

昭和五十九年三月三日

橘高薫風

目次



目次

漫画で見る川柳	金と欲	仕事・商売	戦争と平和	選挙・政治	世の中	展望台	夫・十郎	私の好きな父の句	わが家	妻	横顔	大矢十郎の世界	序	序
.....
167	145	130	127	122	92	91	88	81	47	40	14	13	5	1

見 編 題

返 集 字

坂 川 西

東 上 尾

青 大

樹 輪 栞

寝た振りで聞けば妻娘は父思い

昭和五十一年度
推薦者 路郎賞準推薦作品
西尾 棗氏

妻
と
子
の
話
の
外
に
い
る
平
和

お早うさん言うて悔いなし人違い

間違いの電話へ愛想して別れ

親ゆずり軽い握手にさえ慣れず

ストローの音四五人に振り向かれ

肩書きがのうて気楽に箸を割り

酒飲めぬから甘党にされている

切り札があるなと思う妻の問い

先妻の子と聞き謎が一つ解け

声出して廻すダイヤル又違え

まだ僕に踏めぬ絵があり旗もある

わが心人の心とした不覚

黙って出たのに女房から電話

目撃者になれぬ私にひまがない

昭和五十一年度
推薦者 路郎賞準推薦作品
菊 沢 小松園氏

大正二桁四方八方耐えるのみ

《作品鑑賞》菊沢小松園氏

作者の年齢ではこれで肯定できるが、それ以前の明治生れではそれ以上に耐えて来たので一層深刻だと言いたい。耐えてなお且つ、明治生れを云々される辛さに慣らされて来たのでこの句を通じて切実におもう。

わが書いた字を妻に聞く電話メモ

コーヒーのせいにしておく午前二時

本めくる音の高さを知る未明

銭湯で逢う警官は怖くなし

自転車のベルを鳴らして笑われる

覚えたは勅諭覚えられぬ法規

此の首も担保となつた保険金

小さい嘘一つ娘にバレ妻にバレ

胃袋へ魚呑み込む鶉で居たし

子へ婿へ言いたい事もない平和

痛いところ突き合い銀婚無事に済み

正論が吐けず眠れぬ夜が続き

会
積
し
て
お
く
此
の
人
は
高
利
貸
し

《作品鑑賞》浜田久米雄氏

高利貸しの顔はにくたらしい面もないではないが、やはり金を持っている人並ずぐれた人間ではある。そしていつかお世話になる、ならないは別として一応会釈して通るのが会社の庶民の常識であろう。

引き抜いた白髪を獲物のように見る

《作品鑑賞》黒川 紫香氏

憎さも憎し、とまでは行かないが、歳を感じる初老の気持をうまくとらえている。私のように白髪に覆われてしまうともう観念するより他はない。

ツ
ー
ア
ウ
ト
ツ
ー
ス
ト
ラ
イ
ク
の
朝
を
出
る

入
口
を
塞
ぐ
遠
慮
を
叱
ら
れ
る

浴
衣
着
た
手
前
う
ち
わ
が
忙
し
い

始発バス私にいつか指定席

手洗いへ逃げよか隣へ来たマイク

聞き合わせ知ったか振りの人を撰り

ささやいて来たライバルへつい本音

中古ですかとは失礼な中古だが

感情の働き過ぎを利用され

老産医俺を墮ろせと言うた人

自己欺瞞宮仕えにも四季巡る

人相が良いのか道を聞いてくれ

三十年抱く切札の字がうすれ

お任せをしますへ最低線が来た

更新の免許へやつれていく素顔

記念写真また僕だけへピンぼける

子と並ぶ写真に齡を教えられ

元利そろえて行ったのに犬が吠え

子が抜いてゆく悲しかり嬉しかり

争いへ理ありテレビを消しに立つ

子に涙見せまいドラマから離れ

頬ずりで育てた子にもうとまれる

還曆へ火はつき難し消え難し

還曆へ内濠までは埋めさせず

子に残す財は積みねど善を積む

頼りない父と
思うて思われる

もう誰も叱ってくれぬから淋し

御詠歌の歌詞しみじみと那智詣で

昭和五十六年度 路郎賞 受賞作品

順々に嫁くそれだけを羨まれ

〔評〕 中島生々庵氏

女の子を持つ親心がはつきりうかがえて、『それだけを』という中五が読者の胸を打つものがある。

つり合いがどうにかとれた妻といふ

欲しいとは言わずびったりですと妻

うたた寝の妻はドラマのベルに起き

貧しさを隠す障子を妻が貼る

お湯の出る暮しを妻が聞いてくる

勿体ない勿体ないと妻と旅

七人の五人を知った妻の勘

道で逢う妻は昔の顔をする

さつきから起きてた顔で妻が起き

冷え性の女房にいつか早い冬

女房に嘘字教わる原稿紙

挨拶の下書き妻は鼻で読み

妻に時間聞けば時計も見ず答え

機嫌よく帰れば機嫌の悪い妻

妻の旅雑巾絞ったまま乾き

年毎に妻の肩持つ娘がふえる

元栓を見に寝不足の妻が起き

報復を信ずる妻に励まされ

実印へ妻も覚悟の正座する

《作品鑑賞》河村 日満氏

やはり川柳は、想は古くても中味で勝負するものであることをはつきり悟った。兎も角妻までが覚悟の目を閉じねばならぬ情景を、下五でぴしっと締めくくっている手腕は見事。

国ならば我が家は発展途上国

財産を聞かず子の数聞いてくれ

どん底を何日振り返える子沢山

三十年続く平和に子が育ち

世が世なら娘を売る父となる家計

チップ切つて来たがそぐわぬ暮し向き

ゴム紐でつなぐ夫婦で恙なし

爽やかな寢覚め寝過ごす共稼ぎ

夫婦対夫婦で和む松の内

不機嫌な父へ味方の娘がいらない

除夜の鐘小さい順に寝てしまい

作文は知らない父の朝帰り

人買いは居ぬか売れそな娘が二人

人前を避ける遺伝が子にも見え

ニコチンのくさい童話で子が寝入り

一日へ恥じぬ夕餉の箸をとる

巢立つ娘へ十指に余る願い事

家計簿の都合で父の日忘れられ

娘よ許せ齧じれば崩れそうな脛

子養い終りかけたら孫が来る

愛嬌と礼儀も知って娘の育ち

探
し
物
炬
燵
の
ぞ
け
ば
娘
が
叱
る

耳
良
く
て
悪
く
て
姑
嫌
わ
れ
る

大
声
で
子
供
叱
れ
ば
客
が
来
る

バ
レ
ン
タ
イ
ン
妙
な
口
上
で
娘
は
貢
ぎ

灯油切れかかる補給へジャンケンポン

先輩が来て飲み妻をこき使い

泣きに来た家のテレビにもう笑い

爺ちゃんは駄目やと婆ちゃんの真顔

孫乗せた徐行を又もどなられる

産声を待つ父安産祈る母

どちらでもよいよい元気な呱呱の声

発音は英語で孫の名は漢字

嫁に娘に妻が呼ばれる産や守り

正月は楽し子が来る孫が来る

幸せは孫の仕草を見て笑い

いざという貯金へ小さないざ重む

そばが来て員数外が一人起き

蚊を叩く母の殺意を見てしまい

母に似た物売りが来た皆買おか

履き易い子の靴同じところが減り

反抗期へつける薬が見当らず

六法へ朱線を入れて子は稼ぎ

父叱る人が子供の目に不思議

人間が一番下手な子養い

着飾っていても中古車なる父で

セー
ルスの
話術の
中に凡
父の忌

カタ
カナの
料理も
慣れて
喜寿と
古稀

訪問
着門出
の日ま
で母の
もの

第一回各地柳壇賞 受賞作品

握手など知らない母の低い腰

49年度（第一回）

各地柳壇賞決定

若本多久志選

昨年四月号から「佳句地10選」を創設しました。各社ともに「各地柳壇」は孤島化しているようで、なかには全然読んでいない人もあります。句数まである程度制限して充実を図ってきましたが、はじめのころはなかなか協力してもらえず、規定無視の会は最後に組むという強硬手段をとるなどしました。

大会その他の場合はある程度ワクを外して

おりますが、みんなのための「各地柳壇」であることをご認識願いたいとおもいます。

本年三月号までの、12か月間の「佳句地10選」を若本多久志副理事長に、無記名清記によるベストテンを選んでもらいました。

「こんな名句が詠まれていたのかと、改めて見直す気持です。二賞に準ずるものさえあります」とは選者の弁です。

そこで第一位の方に、句を彫った記念品を「各地柳壇賞」として本社から贈ることになりました。

握手など知らない母の低い腰

大矢十郎氏作

が、第一回の入賞作と決まりました。

ハネムーンの感想聞きたい母である

貧しくはないぞ朝昼晩を食べ

乳房さぐる児にひろびろと母の胸

九時に来た大工へ母は茶をすすめ

格言も親の意見も世に遅れ

父と娘で迂濶に見てたメロドラマ

金色の針尻母に光る物

樟脳の匂う千円母に借り

鍵かけてみたが盗られる物もなし

洋
ト
イ
レ
母
は
便
秘
の
旅
帰
り

姿
見
へ
母
久
し
ぶ
り
立
っ
て
見
る

半
分
に
わ
け
て
も
母
は
小
さ
い
方

ご無沙汰のほうがよろしい嫁いだ娘

久し振り孫はさほどに思うてず

長男をけなせば嬉しそな次男

娘に旅をさせれば他国の情に溶け

親の身になれとは親も勝手なり

阿呆になり来いと阿波から招かれる

一難は長女又一難へ次女

申し訳ないが嫁く娘へ荷が軽い

お目出度は淋しいものよ娘は嫁ぐ

すき焼きへ味を任さぬ父がおり

《作品鑑賞》浜田久米雄氏

すき焼きとなると父がいなくてはならない。父には父の自慢の味つけがあるからだ。醤油と砂糖と水で味がつくすき焼きではあるが、醤油を最初に入れてもいけないし水が多すぎてもいけない。どこで習って来たすき焼きのたき方かは知らぬが、父には独特の炊き方があり味がある。父は父の炊き方が得意であり家の者も父に任せて箸をつけるのである。

御近所が何を指折る岩田帯

《作品鑑賞》川村 好郎 氏

何のけれん気もなくスラリと詠んでいるが御近所も効いているし、何を指折るとはハッキリ云わぬところがよい。しゃちこぼった句が多い今日、こんなフンと思わず笑いが出る句に接すると心温る思いがする。

花嫁の父にわびしい位置があり

子を叱る言葉も変える裾模様

聞き合わせ好きにしてくれ娘は二十歳

嬉しくも辛し出てゆくポチ袋

四女嫁ったばかりへ五女へもう話

妻が言う席へ座って目出度い日

ご両家の美点が揃う披露宴

この人にすべてを賭けた角かくし

末の娘へ貰い手が来て秋淋し

らしいから婦科へ行きます娘の便り

花嫁の父は一瞥されるだけ

盃は面倒という婿二人

嫁がせて帰つてからの朝の冷え

感激の涙祝吟からもらう

嫁かずとも淋しい秋へ日取組む

角のない娘とは思えど角隠し

唄う気になれぬ娘の披露宴

師の影を踏んで覚えた舞扇

結
納
へ
覚
悟
は
違
う
父
と
母

私の好きな父の句

長女	富子
長男	喜一
次女	とよ子
三女	栄子
四女	裕子
五女	みち子



貧しくはないぞ朝昼晩を食べ 十郎
国ならば我が家は発展途上国 十郎

私たちが六人が父の好きな句を選びました。

環境・時代の違いこそあれ、選出した句を並べて見るとき、子育てに費した三十年の我が家の歴史が、時の流れが、そして、それぞれの父に対する思い、父親像が浮かび上がってきます。

〈私の好きな父の句〉

貧しくはないぞ朝昼晩を食べ

自転車のベルを鳴らして笑われる

財産を聞かず子の数聞いてくれ

孫乗せた徐行を又もどなられる

切らんでも良いと言う医者好きになり

長女 川上 富子

生年月日 昭和二十四年九月二十六日
住 所 三重県南牟婁郡鵜殿村二〇一九一五



夫・久司

長女・
祐貴子

長男・祐司

富子

〈私の好きな父の句〉

還曆へ火はつき難し消え難し

髪振って世はバラ色の口答え

これしきへ心の底を見せ急ぎ

風邪引きの休み受話器へ入れる咳

句会追い廻す余生へ夢を持つ



長男 大矢 喜一

生年月日 昭和二十六年一月九日

住所 吹田市泉町五十一—十四

長女・智子

長男・真士

次男・耕史

喜一

妻・康江

〈私の好きな父の句〉

ツーアウトツーストライクの朝を出る

妻が言う席へ座って目出度い日

世が世なら娘を売る父となる家計

落第を中退にする印刷屋

道で逢う妻は昔の顔をする



次女 富岡とよ子

生年月日 昭和二十七年十一月三日

住所 秋田市八橋イサノ二一三—三

レジデンス土田 Cの2

とよ子

次女・亜美

長女・裕美

夫・朗

〈私の好きな父の句〉

申し訳ないが嫁く娘へ荷が軽い

道で逢う妻は昔の顔をする

その汗を拭けと信号赤となる

齒の話すれば聞かずに聞かされる

爺ちゃんは駄目やと婆ちゃんの真顔



三女 江崎 栄子

生年月日 昭和三十一年二月十三日

住所 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町

下里七一二

夫・光洋

次女・千沙

栄子

長女・由佳

《私の好きな父の句》

その汗を拭けと信号赤となる

除夜の鐘小さい順に寝てしまい

ありがたや義歯食う虫はなかりけり

引き抜いた白髪を獲物のように見る

商談へ何がおかしい高笑い



夫・敏行

裕子

四女 三浦裕子

生年月日 昭和三十四年一月一日
住所 新宮市王子町二一五―十四

〈私の好きな父の句〉

除夜の鐘小さい順に寝てしまい

貧しさを隠す障子を妻が貼る

その汗を拭けと信号赤となる

国ならば我が家は発展途上国

ストローの音四五人に振り向かれ



みち子

五女 大矢 みち子

生年月日 昭和三十七年十月二十六日
住所 新宮市熊野地二一六一十二

夫・十郎

大矢 まさ子

生年月日 昭和四年五月二十一日

主人の還暦祝いに句集を出そうと、子供達で知らぬ間に相談し、決めたとの事で驚きながらも有難い事だと喜びました。

結婚後、六人の子育てで、あまり主人と顔を合わす間がなかったように思います。

その子供達も、やっと成人して、それぞれに家庭を持ち、残るは末っ子一人となった今、少し暇が出来て主人の一つ一つの仕草も見えるようになって来ました。

細い身体で一生懸命働いて一家を担ってくれたと感謝しています。そして、忙しい勤めの合間に、よくも今日まで川柳を続けて来られたものだと感心しています。

昭和二十四年頃から地方紙に投句を始め、入選を楽しみに作句を続けていました。そして新宮に川柳の会が無い事に気付き、好きな者同士が数人寄って新宮時事川柳会を作りました。

その後、野村太茂津先生や故垂井葵水先生がお越しになられ、励

まして下さり、その後、川柳塔社同人に推薦していただき、益々川柳に励みが出てきたように思われます。

現在は柳誌「みかん」を発行しながら細々と川柳しんぐう吟社を主宰しております。

毎月の句会も少人数ですが、私もせめてお茶くみでもと、顔を出しているうちに、しらずしらず川柳の沼に足をとられてしまったようです。

句集「みかん船」を発刊するに当りましては、西尾稜先生、橘高薫風先生、野村太茂津先生そして多くの諸先生方にはご多忙中にもかかわらず、主人のために貴重な時間を割いていただき、「みかん船」の船出を飾っていただきました。心より厚く御礼申し上げます。

最後に毎夜遅くまで選句、編集をしてくれた婿の大輪や子供達、みんなありがとう。よい婿や嫁に恵まれて、運の良い事だと主人といつも口ぐせのように言っています。

老後は幸いにも「川柳」という夫婦共通の趣味のお蔭で楽しく送れそうです。

黒潮へ乗り出す腕を頼りきる

まさ子

孫集う何やら語るものがあり

十郎



ま

祐司(11才) 真士(9才) 耕史(4才) 祐貴子(8才) 由佳(2才) 智子(7才) 裕美(6才) 亜美(2才)

じ



還暦を迎えて

展 望 台



世 中
選 挙 ・ 政 治
戦 争 と 平 和
仕 事 ・ 商 売
金 と 欲

髪振って世はバラ色の口答え 十郎

激動の大正・昭和を生き抜いてきた

父・十郎の眼に

現代の日本はどのように写っている

のであろうか

その一端を覗いてみた

髪振って世はバラ色の口答え

《作品鑑賞》北川 春巢氏

「近頃の若い者は」長髪族です。ものを言う度に「髪を振ったり」髪を掻き上げたりしています。年輩の者にはそれが気になってたまりません。それに若い人の未来はバラ色です。先の見通しのついてしまった年輩の者とは違うのです。若者のいうことがいちいち口答えに聞えて来るのは仕方のないことと思いません。

昭和四十八年度 路郎賞 準推薦句

神主でさえも神様には逢えず

昭和五十一年度 路郎賞候補作品
推薦者 西尾 栞氏

平和な世わたくし主義の人ばかり

うかつにも覗きに立てば自動ドア

自問自答ああ飲み捨てるのジュース缶

働かぬ人があふれて世は動く

真相を知るは無力な人ばかり

パン五つ買えるコーヒーと思うまい

民主主義のドラマは親に拳を上げる

ああいやな世だと赤ん坊のあくび

敬老の二字を守って長寿国

石塔になるではないぞビル並ぶ

分けた血も大気汚染に似る世相

教科書を叱られ敗戦まだ続き

うっかりと樺太も書く日本地図

アメリカの寝冷えで日本下痢をする

アポロ以後拝めぬ月にしてしまい

通話料値上げも空し筆不精

連休の疲れ役所は無愛想

立ち退かぬ人へ六法知恵ずける

スカートの上にかかわりなき操

髪染めた娘を外人が振り返える

首筋の髪が邪魔する戦記劇

よう寄つてくれたが保険とはかなし

呼び捨てを黒まで待てぬ社会面

こつそりと買いこつそりと捨てる籤

古々米や三年前の田植唄

警官人形たまには場所を変えて立て

親戚も知らない人が墓まいり
行年も知らずに火葬場焼いてくれ
世のたるみ可愛い子には車買い
十二月お客をにらむ印刷屋
幾種類尾を振る犬を見て飽きる

一言が足らぬ善人無事である

歯の抜けた顔で善人悪びれず

ベニヤ板日曜大工の顔を立て

善人の予想はみんな外される

心からお礼と文字は書き易し

忘年会あぁバンザイの値も下がり

昭和五十八年度 路郎賞候補作品
推薦者 橘 高 薫 風氏

婚
姻
届
処
女
と
書
く
欄
見
当
ら
ず

昭和五十四年度 路郎賞候補作品
推薦者 橘 高 薫 風氏

さん付けて娘を呼ぶ母に暗い過去

昭和四十八年度 路郎賞候補作品
推薦者 若本 多久志氏

和解してから善人は不利を知る

目がものを言っていたから信じよう

道問えば駅前他所の人ばかり

車椅子押す駅員が記事となり
洋服の紳士に悪い人も居り
成金の飼犬善人に吠える
礼言うて座れば終着駅近し
一徹がビルの谷間に田を作り

棟上げのここは変らぬイロハ順

悪い奴を天知る地知る人知らず

割り勘へいいよいいよと笑う下戸

ドラマ中途まだ悪運は天に勝つ

土地売った噂呉服屋出入りする

一徹の後押しに来た春叙勲

異常地価天変地変のない限り

肘張って地主の倅が切るテープ

お隣が売れて我が家の相場知り

ゲートボール医者を忘れて恋芽生え

老い孤独パチンコで逢い医者で逢い

二歳児の口にアリバイ崩される

美しいものに仲よき老夫婦

背囊を負わせたくないランドセル
老眼で読んだ知識は二三日
幸せな子で養いの親に似る
老人ホームにも男ボス女ボス
子の死亡届へ窓口親と見ず

企みはどうあれ盃受けておく

冗談の中のヒントへ身構える

着こなしのセンスへ負けを意識する

煮詰った話を戻す神がかり

握手する片手で拳震えてる

猫撫での笑顔見事な罍を持つ

キリストに用はなくともクリスマス

よくよくの事悪筆の手紙来る

耳打ちの人を味方にして孤独

警察で強姦さんの目と出会い

青年の迷い吊皮だけが知る

煙草屋があつて略図へ物わかり

この人の良さへ物差し当てて見る

日本へキッス教えたハリウッド

磯釣りの事はくわしい紀州弁

格言も添削したい世の移り

倅せと見えぬ倅せ語る人

常連の誰も決めない座が決り

別に気にしてまへんよと日を選び

トロフィーは値踏み賞状みてくれず

じつくりと聞けばあなたに罪がある

今日までは他人が乗った霊柩車

牛肉も天寿を待てば固かろう

顔 役 を 並 べ 初 春 の ロ ー カ ル 紙
督 促 状 以 外 は ど れ も い い 便 り
初 詣 で 神 も 静 か に 起 き て 待 ち
面 白 い 本 が 迷 わ す 置 き ど こ ろ
ゴ ル フ 入 会 倒 産 の 三 日 前

達筆にやや責任もあり誤植

火葬場のどんと来いよと言う構え

早すぎるものに他人の七回忌

御神酒でも巡査は容赦してくれず

青信号競馬のように四車線

触れそうな路幅ダンプに与えられ
一番の違反へ巡查嬉しそう
父危篤らしい車が抜いてゆく
ポンコツ車置場へうかつに停められず
ブレーキはここらで踏んだ事故現場

警察手帳ゆつくり見せては絵にならず

昭和五十四年度 路郎賞候補作品
推薦者 西尾 栞氏

スキップに揺れてる胸とランドセル

当たるなら当たれとダンプ右折する

学童の吊辞涙の涸れた頃

振り向けばもう託児所にない笑顔

逆わずスポーツ評論聞く寿司屋

メーデーの目に羨まれ蔑まれ

親子断絶ああこの家も票は別

当選の人に階段降りる幅

政治家の名刺はいつも票を乞う

天気占い目白の下駄は裏返り

熱弁へうかつ二票を詐欺にあう

選挙ビラやっぱり笑うた方が得

恐ろしい顔ニコニコと選挙ビラ

どの嘘にしようか軽い票を持ち

敵作り味方作って選挙すむ
浮動票選挙事務所によく食べる
我が票はいやなお方の派に属し
バンザイと拍手握手で票は別
公約を崩しにかかる投票日

政見は言い分ばかり白だすき

手袋の白さ汚れぬ手をかざし

失言を責めて国会もめる場所

すげ替えにいとやわらかき首を持ち

法の番人ちよいちよいい鍵を開けている

蔵相の自慢は太子の首を切る

情けある裁き政治に罪を着せ

戦争をいやで済むならわしも言う

君が代へご起立願います平和

原爆忌聖書に欲しい一頁

白旗が一番安い防衛費

防衛費というから物が言いやすし

百パーを注いだ日あり防衛費
勝てば官軍原爆の罪裁かれず
開戦という思い出も十二月
そう言えば口では落ちぬ攻撃機
軽かった命を惜しむ終戦日

冷蔵庫開けてつくづく終戦日

当用漢字いくさに使った字が増える

観光で飛ぶ戦友の眠る島

聞き役に廻ろう平和望むなら

日中友好許されし事のみ多く

安売りの字は下手なほど安く見え

昭和五十四年度 路郎賞候補作品
推薦者 川村好郎氏

ク
ー
ラ
ー
の
部
屋
で
工
事
の
指
図
受
け

昭和五十一年度 路郎賞候補作品
推薦者 西尾 榮氏

二度訪えばくず籠にある我が名刺

金で済まぬ金で済まぬが金で済み

昭和五十一年度 路郎賞候補作品
推薦者 西尾 棗氏

腹の底見せ集金へむごい口

集金に来たとも知らぬ自動ドア

集金へくわえ煙草が待てという

小切手を書く間ハイハイハイのハイ

長電話待たせ集金断われ

集金へ後でおいでと飯を食い

職安が明治ですかと向きを変え

毎日を切り売りに似たペダル踏む

冗談へ直ぐ腰上げる新入社

喧嘩かと思える魚市の朝の声

給油所のひまは一日水を撒き

薫風に晴れても仕事ないに雨

見本見る眼をセールスに読みとられ

人間味左遷の後へ来た左遷

宮仕えの父を手本に事業欲

支払方法こまかく決めてそれっきり

正直言つてなどと商人嘘を言い

音痴とはいえ念仏は澄みわたる

葬儀屋は仏を客として拝み

これ食うて泣け下請けへ書く約手

商談へ何がおかしい高笑い

その汗を拭けと信号赤となる

制服は脱ぎたし年金には遠し
落第を中退にする印刷屋
腹の底見る気ないのに見せてくれ
賃上げのない内職の灯が延びる
休業の貼紙倒産かと思ひ

栄転に無縁地下足袋つきまとう
特殊免許あって出世に遠くいる
割り当てへ無言で責める棒グラフ
お客さんを大事にすれば貸倒れ
定年も間近か貧脈果てもなし

売りに来た人も客なりお茶を出し
罍を罍だとはつきり言えぬ身が悲し
盗墨のように女が出るパート
下請けのその下請けに指図され
十二月五日刻みの嘘を聞く

性格をむき出す名刺置いて去に

雨合羽のまままで昼めし食う勤め

倒産の噂方もなく流れ

落石注意の下でその日の職につき

金の卵などと働き蜂募る

用意した言葉が返る十二月
入札のからくり知らぬヘルメット
字を知らぬ男と思う印刷屋
倒産の品はケースの値で買われ
何探る気か盃がにじり寄る

そ
ん
な
事
さ
れ
て
は
嬉
し
袖
の
下

昭和五十六年度
推薦者 西尾 榮氏
路郎賞準推薦作品

金持ちに近寄るだけで金が要り

正直へ嘘を言わせた金詰り

おとぼけは金を儲けてから覚え

これしきへ心の底を見せ急ぎ

ボ
ー
ナ
ス
が
耳
に
逆
ら
う
小
商
人

退
職
金
近
所
の
人
が
決
め
て
く
れ

値
上
り
の
株
に
血
の
気
の
な
い
温
み

別々に年金貯めて子を思い

百姓に朝寝を誘う土地ブーム

タイムカード金は気楽う呉れぬもの

情熱か欲かセールス負けていず
恐ろしく儲けて倒産する仕組み
涙腺もなく感激もなく儲け
大空の下で日当手渡され
万札は束になりとうて逃げてゆく

夫婦して行く金策に見る効果

銀行も貸します医者とパチンコ屋

奥さんも子もいる前で貸してくれ

田を路に取られてからの遊び癖

利子借りに行く人利子を貯める人

初めから逃げ腰金の要る話
貧乏へ無心貧乏から借りてくれ
サラ金で見られたくない人と会い
灰皿へ寄り添う貸せと貸さぬ灰
眼鏡越し守銭奴の目に疑われ

儲けてるらしいと仇のように言う
くじの列に並ぶひまなし貧乏人
話し合いやはり金持つ人が勝つ
首呉れる約束だのに利もくれず
真実はソロバンに手が触れるまで

宝
く
じ
へ
並
ぶ
汚
職
に
遠
い
顔

落書きの数字も今すぐ欲しい額

昭和四十八年度 路郎賞候補作品
推薦者 西尾 棗氏

友は又財布忘れて来たという

お金ならあります音でピアノ鳴る

借りにゆく微笑鏡へリハーサル

神様も貧乏人は好きでなし

権利證が増えて欠けゆく人間味

友情で貸せば友情遠くなり

金貯めて貯めて淋しい人となり

名案のない溜息は金の事

財布には入れぬ拾うた百円貨

《作品鑑賞》正本 水客氏

百円硬貨ともなれば踏んでゆく訳にもゆかず財布の中へ入れる気にもならない。
ウンわかる気がする。

昭和五十四年度 路郎賞候補作品
推薦者 橘 高 薫 風氏

終りまで聞かず金なら無いという

キヤツシユカード小さな冒険心が湧く

少うしは貰えぬ貸しもあり平和

残金はうやむやにされ来てくれず

税
務
署
が
少
し
笑
え
ば
倍
笑
い

退屈が不労所得の策を練り

感謝状受ける儲けた人だけに

言えば悪し言わねば悪し金の事

税務署でつい本当が出てしまい

如月の汗へも
勤勞所得税

正直な父税理士に
呆れられ

執拗に迫る税吏も
嫉妬心

腹割つて話せば欲のからみ合い

襟巻が寒夜へ用を思い立ち

吊皮を交替させぬエメラルド

漫画で見る川柳

花嫁の父に
わび！
位置があり



川上 大輪 書
川上 溪水 画

妻に時間聞けば

時計も見ず答え



















巻
の
詩

人 暮 男 医 趣 自
と
味・娛
生 女 療 楽 然



人間らしくしやすしらしく生き難し

人生

十郎

それは長い地球の歴史の中で
ほんの一瞬にしか過ぎない

しかしその一瞬に

人はすべてを賭けている

人々の暮し、生活の様相を

川柳という

レンズを通して覗いてみた

人間らしくしやすしらしく生き難し

生き方の大事に勝る死に方よ

惚れたのはどっちでも良いいい夫婦

富も名も久しからずや無に還る

先逝くを競うも愛の老夫婦

ああ天寿落葉が土に還るよう

孝行も不孝も相続先ず済ませ

定年の守衛が抱く歩哨感

医者の名を聞いたばかりへお寺の名

救急車あれは人様乗ると決め

焼香へ数珠は心と別の音

正直の宝を見たり大往生

順番が必ず来ます霊柩車

主役今日火葬場の鍵手渡され

人はみな人ごととなりし齡に遭う

訃報聞くしばらく闇に吸い込まれ

信じられぬ事を信じて悲しい日

胸えぐる訃報重なる秋悲し

記念写真よよと還らぬ人を恋う

淋しさに柳誌開いて葵水の句

茶粥食う喰い道楽のなれの果て
ご自愛を祈ると書いて祈ってず
焼肉の匂い仏壇閉めに立つ
郵便屋も知る督促の多い家
年金で食べて義理には目をつむり

病人に金借りに行く子養い
六尺の雪でも住めば都とか
連休はいく度あつてもたじろがぬ
早起きへまさかの人が配る乳
ご近所の寝巻きも見えた夜の火事

電話口向こうも頭下げた声

昼の湯を出れば現実待ち伏せる

一人食うスイカゆっくり種を取り

暑かろが寒かろが良し日曜日

ふところの軽さ特価へ振り向かず

借り電話受話器を包む破目となり
壁に耳あるから嘘は赤電話
合掌の思えば勝手な願い事
日曜の汗は自由の名で涼し
長距離電話やはり大きな声になり

緊急のメモへ書けないボールペン

配給の頃が懐かし生活譜

顔色は読まない事にして気楽

日雇いの汚職は釘を持ち帰り

留守番にるす頼まれて秋日和

奥さんの腕を褒めれば既製品

生き抜いて大損満期の保険来る

出稼ぎの夫に済まぬ嘘に馴れ

つつましく生きて旗日は旗を出し

この人の良さが本心が透けて見え

恐ろしい人にきれいな嫁があり
出せば直ぐ暮しにひびく義理でもめ
学校放送ないしよの話町へ洩れ
害のない嘘へ相槌打っておく
信じたい人も悲しい嘘を言う

義理を欠く時期か向こうも欠いてくれ

廻したい歳暮へ頑固なゼロテープ

御歳暮の厚意へ妻とする値踏み

義理欠いて欠いて寂しき増すばかり

返事直ぐ出さず遅なつたで出さず

昭和三十六年度川柳塔賞 第二席

雑巾がかわいて愛の破局くる

推薦者

橘高薫 風氏
大坂形 水氏

昭和五十五年度みかん賞 受賞作品

無断使用したい実印そこにある

《評》 若本多久志氏

人間の心の中には、仏と悪魔が同位に棲んでいて、こうした場合の理性をゆさぶる。そのポイントを衝いた秀句だと思えます。

泣きじやくっているのに記者よ慌てるな

心ある人に触れたし秋深し

洪水へ水持つてゆく水見舞

良い知恵はないかとうまい頼みよう

慰めてくれるは倅せ薄き人

聞き分けのない子へ財布のぞかせる

女五十風呂入るドアが隙いてあり

お静かで何より辺鄙とも言えず

建売りの設計に母忘れられ
マイホーム首へローンという真綿
住宅ローンキッチンの灯は早く消え
新築のそれから人の寄りつかず
パート代も予算に入れてローン組む

経済国我が兎小屋暑いです
辞表手にすればローンが足をひく
身に余る家はヤドカリ知っており
一日の中に幾たび四捨五入
熱帯魚あるから待たす部屋があり

吉日を確かめもせず祝い物

赤札で買った差額は寿司を食べ

ふる里の狭さへ集う三ケ日

目も腹もどう狂うたか三ケ日

元旦の何は無くとも暇があり

旧年中のお礼悔みのように言い

年賀状出して無沙汰へほっとする

受け取りのように賀状を見る炬燵

向こうでも受話器を包む深い仲

《作品鑑賞》西尾 栞氏

こういう光景はしばしば見受けるが、こちらも、向こうも受話器を包んでいる、情景躍如とした典型的な川柳である。

昭和四十八年度 路郎賞候補作品
推薦者 菊 沢 小松園氏

そこからまで歩こう
逢えただけでよし

昭和五十三年度 路郎賞候補作品
推薦者 菊 沢 小松園氏

ぜいたくな女おとこの腕を選ぶ

掛取りへ女ではない眼の配り

履歴書に書いてなかった女歴

何処へ発つ女か財布二度のぞく

人妻の酔いは無防備かも知れず

外交が今日も靴脱ぐ母子家庭

相談は若い喪服へ甘く寄り

魚市場女忘れた声が飛ぶ

離れないはなさぬ恋へ蚊が攻める

公然と逢えず密かに尚逢えず

大正の恋は唇合わぬまま

大切な場面睫毛が落ちかかり

今日受けたお布施女の手に渡り

性格の相違タレント又離婚

逆境に芽生えた愛が美しい

小説もドラマも愛に飢えている

逢わぬ夜は寝られず逢えば眠られず

精算書医者はそ知らぬ顔をする

歯の話すれば聞かずに聞かされる

他人ごとの病の個所を聞き洩らし

看護婦の汚職やさしく親切で

退院へ医師は嬉しい嘘を添え

お医者さんはいいないつでも言い勝って

ありがたや義歯食う虫はなかりけり

お産なら良いが夜更けの救急車

あの医者は安いと薬の量を言い
危きを避ける君子にも病魔
医師の門くぐれば患者さんにされ
動く歯をなだめる舌が知る余命
大部屋に医者より詳しいのが一人

子を見るとる母は不死身となつて耐え

言葉 慎めと 唇へ 出物

病院の粗食カロリーの名に隠れ

風邪引きの休み受話器へ入れる咳

看護婦も高いと思う精算書

婦人科の廊下なまめくネグリジェ

気がかりなところで止まった聴診器

閑な人ばかりと歯科医思うてる

底に居る暮しへ病容赦せず

腕時計内側に来て病み上り

切らんでも良いという医者好きになり

セ
ン
抜
き
も
帯
か
ら
出
る
と
高
く
つ
き

昭和五十三年度 路郎賞候補作品
推薦者 川村好郎氏

呼出しも耳打ちで来る奥座敷

宿の膳刺身が見える鉢の底

団体の予定は雨の滝へ来る

二泊三日もう本州で足らぬ地図

目が覚めてああそうだった旅の朝

隈なく観光拝まずに来た神社

従軍でない香港の夜は楽し

つじつまを合わす土産は駅にある

老け役の尻がゆたかな宝塚

笑わさずただ笑われている喜劇

模型屋もこわれやすさに腹を立て

大相撲ほどに集めて少女歌手

寝たきりを起こす五月のふれ太鼓

場所終わるまで延期する齒科通い

横綱に勝つてうつむく勝名乗り

おふくろは相手にもあり優勝戦

金策も被爆も忘れ野球ぼけ

ああ平和電灯つけて野球する

泣いて去り泣いては残る甲子園

甲子園暑さが足りぬアナウンス

早朝マラソン今朝は何やら拾ろてくる

金持ちが帰ったあとで振るクラブ

路郎の句教えてくれたバスガイド

句会追ひ廻す余生へ夢を持ち

選評へうなずいた目が匂へ戻り

馬券買え買えと天皇様の賞

左手で玉転がして女プロ

巻尺へ蛙心配顔でいる

出前箱リーチを教授して帰り

ふところの指図テン牌崩される

買うと打つ金は手品のように出る

悩み持つ人もあろうに踊りの輪

昭和三十二年路郎賞第三席

ダムの水抱かされて山腑に落ちず

推薦者 正本水客氏

気象庁に又おどされた釘を抜く

ふと乗ってみたいブランコ春うらら

確率で来たか予報も楽になり

一人来て二人で来たい草いきれ

美しい嘘かも朝の雪化粧

大阪に済まぬが春の京都奈良

お水取りとやらを忘れてぬくい春

四季だけが無縁仏へ訪れる

生水は飲まぬが里の水は別

街路樹の落葉よそこは居辛かろう

枯れるとも知らずあの日の田植唄

草に寝て語れば過去吸う青い空



フ
ア
ミ
リ
ー
小
句
集



大矢まさ子

生きてゆく人それぞれの時刻表

裁縫箱母の暮しが詰めてある

花鋏緑へすまぬ枝落とす

途中まで編んだ毛糸へ春が来る

顔だけで笑われ落語出そびれる

特価品四季へ少うしズレている

子宝といえど幾たび角隠し

丸い背をだんだん丸くして寒波

秋日和無邪気な嘘を聴いている

仲良しへ遊び足りない日が暮れる

川
上
富
子

エプロンを外すと香水ほしくなる

参観日きりつと母の顔になる

貧乏性まだ雑巾にするつもり

大口を先に廻って寄附が来る

動揺はかくせぬボタン掛け違い

大
矢
喜
一

寄つてたかつて父の還暦祝う幸

還暦の父母住む故郷が僕にある

生きざまが父の句集から溢れ

挫折した父も句集の中に見える

俺に似よ似るなど父の句集なり

富岡とよ子

エプロンがなびく我が家の旗として

挑戦へちよつと高めの自己評価

母さんの影に入っている安堵

父の日の父の背中が小さく見え

父の恥母は繕う糸を持ち

川
上
大
輪

誰も見てないから安い方を買う

手品師の鳩ポケットで拗ねている

二次会でバッタリ会った共稼ぎ

今だから言う真相を一寸曲げ

話し上手に女は齢を盗まれる

柳友から見た十郎像



私から見た十郎像

宗谷川柳社主幹

稚内市 高津戸

明

つり合いがどうかとれた妻という

麻生路郎を心の師と仰ぎ子を謳い妻を詠んだ路郎川柳に陶醉する十郎さんの傑作の一つであろう。

子煩悩で家族愛に没頭する十郎川柳にはどこか路郎川柳と交錯するものがある。それは心の師への自己投影なのだろうか、いずれにせよ十郎作品には家庭を表白した素晴らしい句が多い。

順々に嫁くそれだけを羨まれ

五十六年度路郎賞受賞作品である。十郎さんにとって川柳活動を通じて得た最高の勲章であったと思う。尊敬する路郎賞である。作品から連想する温厚誠実な人柄はお逢いして更にその感を深めた。瘦身に男性的風貌の持ち主だが残念なことに酒はやらない。

下戸の主へ祝いの酒をそつと酌ぎ 明

還暦を祝い句集上梓を讃える一人として心からおめでどうを……
そして最果ての酒に流水を浮かべて乾盃をしたい、夜が明けるまで。

十郎さんに

大阪市 正 本 水 客

十郎さんの還暦を祝って、子供さん達六人寄って句集を出されるという。何とも嬉しい話である。こころ暖まる句集が生まれるのを楽しみにしている。

十郎さんとの個人的なお付き合いは何もなかったが、突然の申し越して五十五年だったか、みかん誌上に一年間雑文を書き続けた事と、みかん賞、すいせん賞の選考を五十七年度から引き受けている事ぐらいであるが、一番の思い出は、五十六年度の路郎賞に私の推薦した句が選ばれたことであろう。

順々に嫁くそれだけを羨まれ

何の銜いもなく、近所の人々の友人の言葉をそのまま句にして、中五のそれだけをに、十郎さんの人柄が込められていて誠に好ましく私は躊躇なく此の句を推したのを思い起こす。

木の国の男で柱目うしなわず

水 客

私から見た十郎像

尼崎市 黒川紫香

「こんど十郎さんが句集を出されるそうな」「それが十郎さんの御息、御令嬢達ファミリーによって句集づくりをされるといふ」「へエーそら羨ましいことぞでんな、十郎さんのお人柄が見えるように、わてらほんとにあやかりたいもんです」

以上大矢十郎氏句集出版の報が届いた時、寄り合った人達の言葉で判る通り、十郎さんのお人柄と誠実で川柳に情熱を燃やし続けて居られる姿が浮き彫りにされたものである。

私と十郎さんは同氏が主宰して居られる柳誌「みかん」で特に親しくお付き合いを願っているが、いつお会いしてもそらさぬ謙虚さで、さすが紀の果て新宮で川柳を盛り立て一家をなして居られる方だなあと思う。さぞや立派な句集が出来て十郎さんの「ここに」に触れられるものと期待している。

ひたむきな努力句集にしみ出る

紫香

川柳に見る十郎さん

高槻市 若柳潮花

順々に嫁くそれだけを羨まれ 十郎

五十六年度川柳塔社 路郎賞を受けられた大矢十郎さんが還暦を迎えられるに当って、御兄弟、姉妹の皆さんで十郎句集を出版される由、吾が事のような喜びを此の身に覚えしました。還暦を迎えられる十郎さんにとって此れに勝る贈り物はないと存じます。

昭和四十四年新宮時事川柳会を結成されてより多くの後輩の指導育成に当たられ特に自分にも厳しい川柳への道を歩んで来られた十郎さん、何日でしたか大相撲大阪場所に招待をして頂いた事がありました。朝から雨の降る冷たい日でしたが、柳友と共に楽しい一日を過ごさせて頂きました。

還暦と言わず喜寿米寿白寿までも川柳一族の長として御活躍されることを祈って居ります。

十郎さんお目出度う。

結納へ覚悟は違う父と母

還暦の句集子の顔妻の顔

十郎

潮花

十郎さん

桜井市 岩本雀踊子

十郎さんとの出会いは、形水さんの御厚意で白浜へ川柳塔の有志で吟行のとき、大輪さんと参加された時で、あれから十数年になる。新宮と大和ではお逢い出来るのも年に一、二度ぐらい。ときたま御電話いただくぐらい、角力好きの十郎さんのご厚意で、大阪場所に何回か見物させていただいた。昭和五十六年度には路郎賞

順々に嫁くそれだけを羨まれ

地元川柳大会には知事、市長はじめ多数のカップを賞に出される、新宮での十郎さんの地位、人徳がしのべれます。

柳誌では北海道宗谷、わかやまとの姉妹誌としての関係にあり「みかん」誌の投句者の増加、みな十郎さんの情熱の外ありません。それ以上の強さは十郎さんを囲む身内が皆立派な川柳作家である事他、柳社にはあまり例のない事と存じます。

願わくば十郎さんにもう少しワンマン的な強さがあればと思います。すが、暴言お赦しのほど。

御身御自愛のほどペンを置きます。

私から見た十郎像

那智勝浦町

中 根 勇 太

十郎さんには温厚にして誠実の人という表現がぴったりである。一見無愛想のようだがその実、大人の風格を備えた悠々迫らざる大陸的人物である。この方に接すると、四季を問わず春風の如き暖かさを感じるのは私一人ではあるまい。この方にアクが加われば満点といつも思っている。句会という場は戦いの場であるから、吟社を率いる一軍の将として陣笠連を引張ってゆく積極性を必要とするのではあるまいか。その豊富な知識をどしどし発表して戴きたい。人物が好すぎ温厚なのでその奥を識るまでには、いささか時を要するきらいがあるような気がする。然しその句は正宗の銘刀を思わず鋭い切れ味で、近來俳句と川柳との合いの子の如き独りよがりの迷句の氾濫する中であって川柳の源流に沿った一線を堅持している点、私の最も尊敬する作家である。最後に柳誌「みかん」発刊以来十数年にわたり十郎さんを陰で支えた、まさ子夫人の労に深く敬意を表するものである。

「みかん」積み荒波越えた夫婦船

勇 太

私から見た十郎師

新宮市 川上溪水

兄（大輪）を経て接近し、私を川柳の深みへ知らず知らずのうちに引きずり込んだ張本人が十郎さんである。

初対面の時でも何となく「ホッ」とやすらぎを感じさせるような雰囲気があり、川柳の一先輩としか感じさせなかったのは氏の独特の人の柄のせいであろう。それ以来、傍から見ても驚く程の情熱を川柳に向け、暮しの中の川柳か、川柳の中での暮しかわからない程の「すばらしい川柳馬鹿」的存在で、万年初心者の私にとっては、最も身近かにいる良い手本であり、目標でもある。……そんな感じの人である。

今後益々、私たちの手本として、良き指導者として活躍される事を願っております。

還暦の句集へ足跡確かなり

溪水

十郎小論集



名句

大矢十郎

俺に似よ俺に似るなと子を思い

十年程前に四国一周観光旅行をした時に、バスガイドが此の句を読み上げて、誇らしげに誰の作か知っている人は手を挙げて下さい、と言って座席を見渡した、私は一瞬ド肝を抜かれた思いがした。此のうら若いガイド嬢から私が最も敬愛する座右の句が聞かされようとは夢にも思わなかつたからである。

嬉しくもあり、てれくさくもあり、只ただ、啞然として手を挙げる事が出来なかつた。

バスは間もなく桂浜に到着する頃であつた。四十名足らずの旅行愛好者同士の未知の旅であつたが川柳人は一人も同乗していなかつた。然し知る人ぞ知るものである、二名の挙手を見た時は旅の楽しさを見付けた思いがした。

あたかも、森の石松が三十石船で聞いた次郎長の名の如く爽やかなものであつた。路郎先生を知らない私にとっては路郎の句か、句の路郎か？どちらでも良いのだ、私には此の一句が生涯唯一の座右の句なのである。

人は死して名を残す、人生は長く死は瞬刻である、然るに死後の長さは永遠である。

路郎先生は名と共に句を、句と共に名を残した偉大なる教祖でもあつた。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

雲の峯という手もありさらばさらばです

人はみな一日一日が死への旅人であると、言えよう。生あるもの必ず滅し形あるもの必ず壊るのとえ、世のものを総てがこの旅路に他ならない。ただ人間のみが自然の理法に対処し得て死への準備と心構えが出来る事を訓されている。

生き方の大事に勝る死に方よ

十郎

川柳感

大矢十郎

川柳の真意を解せず只々軽視軽論を放っている知名人の多いのも困ったものだ。昔から中国の諺に、男女四十に満たざる者、共に閨房を語る勿れ、とある。

これは、知っているつもり、分っているつもりでも、余りにも知らざる事の多きが故にこれを語る資格なしと言う事である。

川柳を語るに、マスコミや、タレント達の軽々しい川柳感には、多くの川柳作家が、呆れさせられている。

詮方なしとして、嘲笑しては、川柳の普及にはならぬ。

現代川柳の寛容さを、味わいの深さを、一般人の人達に、是非、知って貰いたいものだが去る、五月のTBSテレビ「すばらしき仲間」には、川柳関係者から、一斉に非難の声が上がった。

もつとも、出演者全員が、川柳とは何かを

全く知らず、卑猥な言葉や、ダジャレで、視聴者の笑いを誘おうとする、腹立たしいものであった。

それに比べて、八月に放映された、NHKの「よめやうたえや川柳天国」は、些か、マスコミに振り廻された番組であったが、少しでも、川柳とは如何なるものかを、視聴者に訴えることが出来たのではないだろうか。

ご尽力下さった薫風さん始め、柳友の皆様、心からお礼申し上げます。

只、欲を言えば、電話がマヒする程、殺到した句の中で、テレビに映ったのは、ほんの数句だったが、もう少し、川柳関係者の意見も入れてほしかったと思う。

しかし、これらの句を、NHKの厚意で、句集にしてくれるとの事で、一応、目の目を見ることにはなったが、句集が、川柳人のみならず、多くの一般視聴者の手許に届き、年を追って、意義のある番組に成長してくれる事を祈りたいものである。

「みかん一三三号」より抜萃

涙

大矢十郎

涙には塩分があるが、其の時の感情如何に依つて、その濃度が大きく異なるらしい。煙や風から目を保護する時の涙、郷愁の涙、等は極く薄い塩分だが、屈辱の涙、怨み骨髄に達した時の涙は最も塩分の濃度が高いとされている。悲しみの涙、激痛の涙、感激の涙、等はその中ぐらゐであり私達日常生活の人間性において適当に出してこそ慈愛の一環として情熱的な人生が送れるのではなからうか。

先日小二の孫が爺ちゃんも泣いた事あるの、うんあるよ、と言うと、どんな時に泣くのと聞くから、そりゃ悲しい時だよ、僕も悲しい時に泣くんだけど、婆ちゃんは嬉しい時にも

泣くんだよ、そしてテレビを見ながら泣いたよ、爺ちゃんもテレビを見て泣く事があるの……うん、だけど此の頃のテレビではもう泣く事がないねえ。でも七月に爺ちゃんのお兄さんが死んだ時に泣いたよ、そして十月にも爺ちゃんのお兄さんが死んだね、あの時にも泣いたんだよ。だけど僕は泣かなかつたね余り悲しくなかつたのかな？でも僕はお友達義夫ちゃんのお父さんが亡くなつた時に、泣いていたね、友達のお父さんなのに、そんなに悲しかつたのかい。ううん義ちゃんのお父さんの事よりお父さんに死なれた義ちゃんが可哀想だつたから、と言って目頭を光らせる。これを聞いて私まで危く熱い雫が落ちそうになつた。しがない私達の孫にも身につまされる思いやりの心があつてくれる本当にありがたいとせねばなるまい。こんな世の中だけれど、こんな孫がいてくれる、長生きしなけりや。

七人の孫よ涙を失うな

十郎

台風におもう

大矢十郎

今年も、いよいよ台風シーズンが訪れた。毎年の事ながら、大なり小なりの台風が、二つ三つは決まってやって来る。梅雨時の降雨量が少ない年ほど、大型の台風を覚悟せねばならない。今年のようにカラ梅雨がいつしか梅雨あけを宣言して、真夏の太陽が照りつける年こそ、最も注意して嚴重なる警戒が必要であろう。

台風の進路に母の故郷がある

雀踊子

気象庁のデータに依る台風予報は、残念ながら、過去二十年間に三回くらいしか中の記憶がない。台風の発生地点及び時刻、風速においては信頼出来るが、肝腎な雨量と進路に関しては大きな計算違いが報道される事が多い。

台風の進路を示す扇型

塔泉

台風が進路変えたとき気象庁

十郎

こんな無責任な予報に、紀伊半島は幾たび恐れおののいた事であろう。来なくて幸い用

心に越した事なしと、家族で喜びあえるのもありがたい事ではある。

台風に行くぞと見せて扇すかし

静夫

気象庁に又脅された釘を抜く

十郎

台風は空気の大移動であり、地球の深呼吸であろうか。これも自然の摂理、地球の新陳代謝として、生命あるものは従わねばならない。それにしてもあの暴走ぶりには、ゆめゆめ油断は禁物である。

台風一過お詫びのように青い空

十郎

被災者に済まぬが台風から景気

十郎

台風の爪跡、それは無惨なものである。時には家を呑み、人命を奪う事もしばしばである。然し、この尊き犠牲を教訓として、復興された河川、防波堤、山肌、道路等の充実に見るにつけ、あの台風がなかったら、果たして改造されていただろうか。

低地に住んでいた人達も、現在のような立派な土地に立派な家を建てて、明るく、そして以前より活気ある生活が出来得ただろうか。台風は教訓と試練を与え続ける事であろうか。

上陸地名乗る台風世に残り

十郎

「川柳塔六五二号」より抜萃

男の子は王将

大矢十郎

戦後は女が強くなったというがホントだろうか
そこで川柳人の親は、男の子をどのよな目で見て
いるのか覗いてみよう。

「川柳塔五七六号」より抜萃

「一男五女」こんな子持ちである私に五月号特集の「男の子」を書けという編集部からのご依頼である。せめて「女の子」に変えて貰えないかと異議申し立てしたいほど男の子の話題と育児経験には乏しい。

妻は長女富子が産れて四カ月目に妊娠の診断を受けた。然し余りにも早過ぎる上に、上の子が可愛いなら堕しなさいという医師の冷たい親切へ少なからず抵抗を感じた。それから妻を説得して産んで貰ったのが「男の子」であった。「一姫二太郎」親戚中からこの上もない祝福を受けたものである。喜びも一入で、名前もそのまま、「喜一」と命名し、してやっつたりの感に満ちた。

その後はなぜか女の子ばかり四人産れ、末の子もやつと中学へ入学……とうとう終止符を打った感であるが、

まだ妻に怖い日もあり月七日 十郎

男の子は育てにくいというが、満二歳頃から言い付けは絶対を守る子であり、又、守ら

せて来た。そして私を一番慕ってくれるのはこの子である。

四歳くらいの時だったろうか、内風呂の故障で銭湯に連れて行った時の事である。腰にタオルを巻いた私の後を息子が同じように腕組みでついて来る。私は歩きながらさほど邪魔にもならぬ桶を足で横へ寄せた。すると息子が後から追いかけて来てポンポンポンと五つ、六つの桶を蹴りながらこちらへ向かって来る。その中に客が頭を洗っている桶もあり、手を伸べて桶を探している客がいたのを忘れる事は出来ない。思い出す度に赤面の至りである。

明るく、無邪気であったが、一つ違いの妹の方が大分大きかったため、皆から弟に見られていたのだけは不満のようだった。

中三の頃だった。突然息子が顔色を変えて「父ちゃん、うちに重病人がいる、医者を呼んだ方がええんやないか」と言い出したので、聞いてみると「便所に相当な出血の跡がある、

あの分だと余程悪いに違いない、一体誰やらか」と驚きと心配で青ざめている。側で妹が黙って頬を染めていたのが印象的だった。あれでいいのだと後で妻と笑い合った。

高校二年の時、喜一に玉子を茹でさせた事がある。茹で上がったのを見ると、全部割れて中身がはみ出している。馬鹿な奴だと私は腹立たしく思い、「熱湯の中へ入れるからこんな事になるんだ」と叱ると、「それは解っているけれど、玉子は動物である。しかも生きていて、それをじわじわ煮るのは可哀想だから」と言う。喜こんでいいのか、悲しんでいいのか、これが高校二年のたった一人しかない長男の言葉であった。

高校卒業後、近商に入社してまもなく京阪神より五百四十店が参加して森永乳業製品の展示競技会が行なわれ、見事息子が一位になり、金賞を戴いて帰省した時は我が子ながら頼母しく感じられた。しかし、脚光を浴びたものの高校出という学歴に末を案じて、当時

日の出の勢いにあつたピロピタンの芳丘平八郎社長のもとへ単独で入社を申し込んだのである。ここで生き馬の目を抜く大阪商人を啞然とさせた「ピロピタン商法」を叩き込まれたのである。学歴第一の世の中で、実力一本、学歴を問わぬピロピタンこそ男が思い切り打ち込める仕事だと思つたのである。

入社してみると思つた以上に苦しい。団地を歩き廻るセールの日が続いた。

炎天の仕事に慣れた子の便り

十郎

足に豆を作り、痔を患いながら勤勉振りを初めて社長が褒めたそうである。その後、若冠22歳ながら工場長、店長、研修生教育と抜擢されたが不況の波はピロピタンにもおとずれ社員の大半が辞めて行つた。その中であつて、これではいけない、自活の道を立てておかなければと思ひ、吹田市に「北大阪囲碁将棋センター」を開設したのである。

子がレール敷け犬釘打つ父で

十郎

この時は大分なけなしの金を注ぎ込まされ

だが、お蔭で連日満員、煙草屋も兼ねて退社後の忙しさは嬉しい悲鳴である。碁、将棋共誰の相手でも出来る初段で、都合よく出来ている。故木見八段門下の大野九段が、何がお気に召してか大変可愛がつてくれて、時々来て下さるのが何より光栄ですと喜こんでおります。

弱気だつた息子もピロピタン商魂を叩き込まれて、植物的であつた顔も心も鉱物化してしまつたようだが、24歳になつた今日、幸いにも理解ある伴侶を得、その上長男も授かり、忙しいながらも充実した日々を送っている。真つすぐな道を歩んでくれるよう祈つている。

ほつといつて見よう息子は嘘が下手 十郎



一分間の柳論

大 矢 十 郎

俳句を作り始めて四、五年になるという近所の知名人とバスに同席した時である。句会の帰りだというその人が私に、川柳もいけれど俳句をやってみませんかと言いだした。私にはとても難しいから出来そうにありませんと答えると、いや本当に難しいですよ、今日も半数近く没になりましたがね、選者からあなたの句はまるで川柳だ、と言われました。どうしても私の句は川柳になってしまうんで

すよ。と、浮かぬ顔である。そこで私は失礼ですが、よろしければ、と没句を拝見致しますと川柳には程遠い句ばかりで一句とて川柳性のある句を見出す事が出来なかつた。残念ながら俳界に於ける川柳への認識不足が俳句の出来そこないが川柳だと思ひ込んでいるようである。現代川柳をより多く普及して、一般の認識を高める事への責任を痛感する。



お
お
や

大 矢 十 郎

雅号ぶつちやけばなし (149)

じゅうろう

父母は十人の子を産み育てて来た。その十人目に生まれたのが私である。十人目だから十郎、いとも簡単なようだが、それなりに命名に苦労したらしい。十は最大の数であり又最小の数でもあり、四方に伸びゆく可能性が含まれている。しかし、上へは頭打ちにして望まれず、下へ細く伸びてゆく運命の字画である。郎は男を表すものである。官吏であつた謙虚な父に、小学生の頃聞かされてきた。名は体を表すというが親を恨む術もなく五十二年を過ごしてきた。兄二人が不慮の死を遂げたが、現在四男四女八人が元気で、私達兄弟の年令を合計すると五百歳になります。ちよつとした私の秘密です。

披講と呼名

大矢十郎

川柳塔五月号の大相撲観戦記の中で、太茂津氏が勝負の世界に於ける間の刻の重要さを力説されているが、全く同感である。此の間の刻とは、勝負の世界のみならず、我々の日常生活においても、如何に必要であるかという事が痛感させられる。

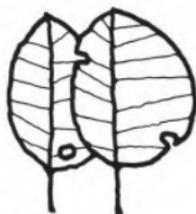
まして私達の川柳句会においては、間こそ生命である。此の間の刻が、短か過ぎても、長過ぎて既に間を失っているのである。いわゆる「間抜け」である。間の刻の重要さとは、其の雰囲気が求める最もふさわしい刻にある。よく落語や漫才などでいい洒落を聞く事がある。ああ、いい洒落だなあと思ってい

るうちに、ペラペラしゃべられると、次の言葉が耳を抜けて仕舞う事がある。又、どうだ、いい洒落だろうとばかり長い間を持たされるとかえって、白けたムードになってくる。

そこで、ああ、いい洒落だなあと味わうことの出来る間が欲しい。僅か、三秒程度の間である。これに依つて、次の言葉もはつきり聞き取ることが出来る。川柳の披講においても、良い句が読み上げられると、ああいい句だなあと思っているうちに、矢継ぎ早に読み上げられた次の句は、耳を抜けて仕舞うことが多い。せめて、三秒程度の間が必要なのである。句に依つて、間が一秒くらいの長短があつて然るべきであり、選者は、選句と共に、朗読の責任がある。披講こそ、川柳を楽しいものにする一大要素である故に、句の心を汲んだ口調で感動を伝えなければならぬ。そこで、最も大切なのは呼名であり、其の間である。披講は必ず二度読みすべきであり、一度読みに省略することは慎まなければなら

ぬ。二度目読まれた時は、すでに呼名の声と、間の刻が準備されているのである。皆に聞える力強い声で呼名すべきであり、此の間の刻は、一秒〜二秒である。誰方ですかと再三問われてから蚊の鳴くような呼名や、吹き出すような笑い声の呼名とか、恰も、悪事が暴露した時のようなふてぶてしい呼名等は、慎しむように心掛けたい。入選句だから、胸を張って元氣ある呼名こそ、活氣ある句会に導く原動力であり、皆が求める川柳道場ではなからうか。

「みかん七〇号」より抜粋



戦争展

核と

大矢十郎

八月十五日、今年も終戦記念日が訪れた。此の日があるから戦争のむなしさ悲しさを、次代に語り継ぐ事が出来るのであろう。

しかし、真実を語れば講談の如く聞かれ、又、真実を書けば、小説の如く読まれていく。今日、此の平和と豊かさの蔭には、膨大な犠牲のあった事を、思い起こさねばならない。

其の大きな犠牲を証明する戦争展が、大阪心斎橋大丸に於いて、八月四日から八月十五

日迄、開催された。第二次世界大戦に於いて、最大の悲劇であり、有史以来かくの如き悪の組織化は存在しなかったと言われる。ナチスドイツの、ユダヤ人大虐殺である。其の数は、六百万人とも言われ、大半は、アウシュヴィッツ強制収容所に於いて、四百万人を超える人命が絶たれたのである。其のほとんどが、夜間、秘密裡に捕縛され、強制収容所に送り込まれると共に、一切の権限を奪取された。所謂、フランクル著の「夜と霧」である。

これらの悲しき犠牲者達の、遺品と遺髪が、そして、写真が初めて海を渡って、日本にお目見えした。物資溢れる大丸の冷房に触れて展示された、毛髪製の生地や、小さな靴、そして、何人もの死を見た囚人服達は、口があれば、何を物語り、何を叫んだ事だろう。「もう、こんな事があつては、ならぬ！」と、強く、全世界へ訴えた事であろう。

しかし、世界の現実には、これ以上の恐怖に包まれ、刻々と、自滅の道を辿っているの

ある。米ソが所有する核だけで、地球上の生物を、七度滅ぼすだけの量が、保有されているという。話一割に聞いても、世界の人口の七十パーセントが殺傷される勘定だ。

ソ連の欧州地域から引揚げる、中距離ミサイルSS20を、極東地域へは移さず、廃棄処分にするという、アンドロポフさんの、英断をたたえたい。そのついでに、極東に配備すみのSS20の方も、捨てて欲しいものだ。

これだけで十分過ぎるから、余分には不要なのだろう。不要な核は、如何に保管しても危険だから、廃棄処分に踏み切るのであろう。しかし、クレムリンでは、核戦争やむなしの事が、人々の背筋を寒からしめている。

今、ソ連では「核戦争を生き抜く法」のパンフレットが、一般国民に売り出された、と伝えられている。内容は、核避難術然々である。我々日本人も、世界唯一の核被爆国という錦の御旗を、いつ迄振り続けられるか、容赦せぬ国のある事を！

末っ子

大矢十郎

時世の移り変わりというものは不思議なものだ。アメリカばかり見ていた日本がやつと中国へ目を向けるようになった。華国鋒首相の来日が一層友好の絆を太くした事であろう。

日中関係二千年の歴史の中で見る事のなかつた最高首脳の来日であった。人口十億の御大は流石に大人である。その大人が近年悩んでいるのが人口問題である。中国では古くから福・禄・寿―出来得れば多くの子孫に恵まれ相應の財を持ち長生きする事が幸福な人生の象徴とされて来た。それが今では一最好・両可―三多に置きかえられた。

一人っ子が最も賢明で、二人ならまあよし、三人では多すぎる、時世にマッチした偽らざる言葉であろう。我が国にも適應する言葉で

ある。明治・大正の頃は制限なく産み育つたものだ。食物はあり教育不要で他に娯楽もなかったのかな？本誌黒川紫香先生の「かかる子は一人」を読んで、私自身相通じる物が多く感動させられると共に親しさを覚えた。

末っ子で六男の私に母が同じ事を言っていた。そうして父・九十一歳、母・八十八歳で、両親共一日の患いで他界したが私と同居中の時であった。「かかる子は一人」、老後は末っ子の所が一番良かったらしい。大往生だった。

「みかん第九十二号」より抜萃

さん・と・先生 大矢十郎

私達の川柳句会には大句会小句会を問わず初心者のお席を見る事が屢ある。初出席の初

心者にして見れば何事も控え目に平身低頭して誰彼なしに先生呼ばわりする事がある。

これは誠に美しい光景ではあるが永い目で見ると決して美しい光景でない事を痛感させられる。何故ならば、一度先生と呼びハイと返事をされたならもう永久的に先生呼ばわりをしなければならぬ。途中でさん付けにする事はかえって感情を害する嫌いがある。

こうした気持ちが折角芽生えた楽しい句会への足を遠ざけてゆくのである。人間は感情の動物である。殊に小句会においては親睦をモットーに齢も肩書きも捨て、みんな「さん」付けで呼び合いたいものである。

「みかん第七十八号」より抜萃



すばらしき仲間

(敬称略)



喜寿と古稀まだ贅沢な願い事	大	阪	市	中	島	生々庵
一步出ずれば我れ旅人となる心	八	尾	市	西	尾	栗
揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ	豊	中	市	橘	高	薫風
ブランコが夜中にひそり揺れている	尼	崎	市	黒	川	紫香
形振りかまわず種を播き肥を遣る	和	歌	山	野	村	太茂津
もう少し生きるつもりで辞書を書く	高	石	市	川	村	好郎
本読まぬ人の立派な蔵書印	大	阪	市	菊	沢	小松園
百花繚乱どこかに白い馬がいる	大	阪	市	正	本	水客
賽銭を上げるだけだが手を洗う	大	阪	市	大	坂	形水
ひよつとしたら覗ける二十一世紀	大	阪	市	金	井	文秋
かづら下舞台の汗が沁みとおり	高	槻	市	若	柳	潮花



灯台の夕陽神話を抱きよせる 出雲市 尼
幸せにおごとと運は逃げてくる 島根県 藤井
天下泰平は軍配ばかりにて 青森市 工藤
石けりの石をけつたら戻れない 大阪市 清水
お若いと言われ一瞬背を伸ばす 東大阪市 竹中
孤に耐えるここよりほかに花の下 倉敷市 水粉
口座振替キャッシュカードは妻が持ち 倉敷市 野田
人が寄る噂をちよつとずつ持つて 藤井寺市 児島
みんな許して心豊かに生きている 富田林市 岩田
人間の知恵が上下の差別する 新宮市 川上
水甕があふれて朝をうたがわぬ 米子市 八木
離婚歴ある方が当世かも知れん 東大阪市 市場
馴染客犬へも土産買ってくる 大阪市 川口
アンテナと呼ばれ奥さんよく出掛け 倉吉市 奥谷
時折りは悔いがないようになまけてる 和歌山市 福本
行革の風が冷たい 長寿国 河内長野市 井上
心の準備「サヨナラ」言うだけに 大阪市 天正
一生を子に賭け車輪の軸となり 吹田市 藤村
メ女

緑之助

明朗

甲吉

健司

綾珠

千翁

素身郎

与呂志

美代

溪水

千代

没食子

弘生

弘生

弘朗

英子

喜醉

千梢

女



カンナ炎ゆ私も赤い服を着る 寝屋川市 宮尾 あいき
道連れの方言葉し気まま旅 倉敷市 本田 恵二朗
宮水を守る婚家の白い壁 尼崎市 春城 年代
僕だけの心の中にある祭り 大阪市 神谷 凡九郎
宿命と悟り木魚は耐えている 奈良市 森田 カズエ
男にはかけこみ寺が見当らず 大阪市 中川 滋雀
栄光の男の果ても北枕 八尾市 大路 美幸
気配りの温さ知ってるから帰る 和歌山市 富上 光代
こんなときまだ借りられる母の知恵 島根県 堀江 芳子
愚癖こぼすかわりに妻はしげき節 島根県 堀江 正朗
十字架と歩いて足を軽くする 京都市 山本 規不風
後悔のない風船をふくらます 岸和田市 植山 武助
渋抜いて甘柿にした母の愛 那智勝浦町 中根 勇太
一期一会記憶の中の心の灯 大阪市 江城 修史
紅生姜とりもどせない彩と住む 富田林市 和田 維久子
妻がいる空気みたいに居てくれる 大阪市 西田 柳宏子
ライバルに新春の笑顔を惜しみなく 大阪府 坂口 柳宏子
お母さんを古いふるいで片付ける 大阪市 柳原 静香



もののはずみで廻るわたしの風ぐるま	大阪市小出智子
まだ丸くなりきれなくて石を打つ	高石市牛尾緑良
ウソでよし日記きれいな過去にする	堺市高橋千万子
頂を追う夢があるかたつむり	和歌山市堀端三男
悲しみのところがわかる池の月	八尾市宮西弥生
愛するがゆえの悲しい嘘を言う	尼崎市奥山美智子
秋くれば秋の着物のあたたかさ	和歌山市内芝登志代
善人の顔で神さま仏さま	和歌山市若宮武雄
春の兆しへ手垢のつかぬ毬を買う	和歌山市西山幸
なまぐさい糸では織れぬ綾錦	寝屋川市柴田英壬子
お多福の妻だが私の勲章ぞ	桜井市岩本雀踊子
落ちる日を知るや知らずや寒椿	和歌山市坂部紀久子
燃えてきた女心を消す男	羽曳野市塩満敏
趣味の手話披露されたり嫁の宴	上富田町竹中幸一
アキ缶もねころんでいる春の土手	和歌山市樫村ふみよ
現身か化身か菩薩の残り紅	和歌山市浦野和子
一冊の本に背すじのしゃんとあり	大阪市内河野君子
溜め息へ盃を持つ目も曇り	大阪市内大矢直吉



二次会で張り切ったのが出社せず 大阪市 浜田儀一
楽しさは花に目覚めをさとられる 稚内市 滝川句楽
吊し柿妻はせつせと紐で編む 松江市 岡崎祥月
下手に動いて自分から落ちた落とし穴 大阪市 西川誓二
芋粥で育てた児等にも孫が出来 岸和田市 葛城逢春
雨あがり跨いで通る蟻の列 田辺市 幡井栄
下宿屋に過保護とわかる荷が届き 新宮市 篠原輝寿
夕波へ祈る崩れた石を積む 和歌山市 野村きみ
公園の隅で日銭をかぞえてる 西宮市 紀市郁栄
寒い日の雑木林は庇い合う 富田林市 板尾岳人
鍋の中煮えているのにまだ訓示 和歌山市 小川佐知子
死ぬまでが主役の土を今日も掘り 和歌山市 寺田裕美
合わぬ舌これが名物京料理 奈良県 奥田だるま
遮断機が降りここの話する 寝屋川市 稲葉冬葉
捨てに来た恋海岸は秋の彩 堺市 河内月子
勘の良い犬は知ってる靴の音 大阪市 黒田秀雄
顧問とか会長とかで役ない世 唐津市 新岡回天子
ぶつかってみると女の方が燃え 大洲市 米沢 曉明



新緑の木々の谷間に映ゆる顔 藤井寺市 足立時子
評論家のそんな通りになりません 新宮市 前田笑三
ひたむきに生きて後悔せぬつもり 河内長野市 井上伸子
病みたくもないのに探すレントゲン 熊野市 徳田古城
後が無い思案ほどほど腰を上げ 熊野市 市谷一也
税金で食べてる同士だだをこね 那智勝浦町 畑中六宏
受取りを求めりや治療荒くなり 新宮市 和田健一
春風も寒く感じる物価高 那智勝浦町 藤木淑也
地球儀の平和を唾う核ボタン 室蘭市 岡崎 守
背負いたる影の重さや老いの坂 泉大津市 武内 薫
嫁のぐちばかり聞かされ汽車の窓 新宮市 西桐美音
抽選がすんで賀状をとくと見る 新宮市 嶋田悦子
宣伝を客に持たせる紙袋 岸和田市 狭間希久志
シン追うて足棒にして陽が落ちる 那智勝浦町 向山健四
青年の終着駅のない歩幅 富田林市 藤岡花梢
薬局でうんこのかたさなど申し 八尾市 高杉鬼遊
子守唄耳に別れた母がいる 堺市 藤井一二三
味噌汁の実を大切に思ってる 大阪市 西出楓楽



喜寿近し生命ある句の出来ぬまま	藤井寺市	笠原	吸江
酒やめた父あんパンを食べている	竹原市	小島	蘭幸
幸せの尺度自分で決めている	大阪市	神夏磯	道子
老夫婦明るい話題を選っている	大阪市	岡田	ふみ
菜の花に見つけた蝶も夫婦連れ	大阪市	林	ひろ子
二歩三歩妥協へ間口あけておく	大阪市	大野	武太
ふるさとが移動してくる甲子園	大阪市	萩谷	まさ
ちっぽけな善意でもよし心満つ	岸和田市	高橋	操子
悪役はとてもやさしい素顔持ち	岸和田市	高須賀	金太
あ、平和妻子と囲む鍋の湯気	富田林市	原田	明男
線香の煙が邪心を消して行く	交野市	山本	テルミ
ふしくれた手に指輪さす形見分け	守口市	岸野	キミ
嫁ぐ日の涙真珠の艶を持つ	阪南市	深日	白光子
けさの妻ワルツで廻す洗濯機	守口市	長谷川	白司
メロドラマ老妻にわるいが昼寝する	宝塚市	傍島	静馬
角かくし好かれる嫁になるつもり	川口市	白鳥	覚朗
妻と子に済まなく正直者でいる	稚内市	高津戸	明
妻が左に寝ていてよくねむれ	松江市	柳楽	鶴丸



嫁ぐ娘の華燭の中に居て孤独	和歌山市	垂井	千寿子
諦らめを悟りに変えて六十路坂	和歌山市	中田	里美
すべり台の上から明日が見えそう	和歌山市	上平	狂虎
久々に逢いし友の手温かく	大和郡山市	岡田	寿美
耐え抜いた余白安堵という広さ	稚内市	上田	金松
独居に月も笑顔を見せてくれ	和歌山市	小倉	操
親だけがあわてています適令期	新宮市	山田	平和
喋るだけ喋って心軽くする	和歌山市	田中	輝子
影法師小さな声で陰謀す	東大阪市	斉藤	三十四
芸のない男なにかを食べている	八尾市	飯田	悦郎
宴席にちらほら酒豪だけ残り	和歌山市	中嶋	正博
慈雨ほしい人も草木も干涸らびる	和歌山市	田中	悦子
明日嫁ぐ母子背中流し合う	和歌山市	山路	佐代子
弥陀といてなぜか本心飢えている	和歌山市	岩橋	芳朗
川は流れる人のところに目もくれず	和歌山市	南出	陽一
哭きながら玉音聴いた日のむぎ茶	和歌山市	芝	あつむ
葉箱古い葉が有るくらし	和歌山市	玉井	豊太
炎えるよな老いの絵筆に温まり	和歌山市	谷口	信子



心みな月にあずける帰り道 和歌山市 後藤正子
郷に入り従う嫁とゆずる姑 日高町 天満三千代
あぜ道の雑談相槌うつカエル 那智勝浦町 向山民代
持ち唄をたらふく呑んで忘れたり 那智勝浦町 浜口鉄晴
吊し柿障子にうつるドレミファソ 那智勝浦町 福井正一
原点に戻れば大志だった道 橋本市 森脇善太
焦らずに一直線のわが人生 橋本市 中山修
寝返りをうって信用から外れ 岩出町 西口忠雄
結局は自分は自分と悟ってる 湯浅町 氏原那智子
達成のノルマが語る靴の減り 田辺市 川田花泉
地獄耳自分の噂聞きもらし 串本町 小西孝一
久方の母を訪ねて廻り道 新宮市 中森平城
売り上げは減っても税金ついてくる 新宮市 岩橋華水
肩書きが消えて昔の顔がない 熊野市 坪田冬花
中堅の采配見事もりたてる 新宮市 塩崎公治
カレンダー師走の足は早くなる 新宮市 福住吉加
ここだけの話と女喋る日々 新宮市 福住昌子
手術前妻のやさしさ気にかかり 新宮市 船越正



新妻に秋の一夜の明けやすし	かくれんぼ日が暮れる頃もりあがり	先輩の足跡踏んで辿り着き	灰皿へ意見の合わぬ灰落とす	達筆へ期待ふくらむのし袋	指で拭く窓からのぞく小さな明日	料理屋の三味の音を聞く空出張	結納日親は子よりも落ちつかず	知らぬ地で知らぬお方の情に泣く	シユバイツァーの心にあらずガを叩く	鉄を打つ間合いを鍛冶屋知っている	時々の喧嘩も夫婦和の秘訣	入園児親の不安の外にいる	陽の匂う布団へまるい夢を見る	母の留守お勝手の音消えている	住みづらくなつて蹴飛ばす石もない	他愛ないことを潮風浴びながら	青年の意気で祭の獅子が舞い	
新宮市西桐	新宮市小井	新宮市南	紀宝町黒瀬	熊野市舛屋	熊野市上垣内	熊野市垣内	熊野市峪口	熊野市山本	串本町前田	鶴殿村崎山	御浜町平野	御浜町平野	御浜町平野	御浜町平野	御浜町平野	竹原市山内	堺市河内	石川県中村
よしほ	博代	八千代	登紀夫	すみれ	利凡	喜佐司	寛山	義廉	和	澄孝	英之	文水	薫子	真琴	静水	天笑	与志	



暗い道行くきむらいの父である	備前市	武内雅堂
枯野ゆく風にやさしさあるを知り	八尾市	高橋夕花
ひげ剃った鐘馗がさがす燕尾服	尼崎市	春城武庫坊
粗大ゴミ三種の神器も捨てられる	いわき市	富岡七郎
二人だけの花を咲かせる種袋	吹田市	西川景子
まるくまるくなり海岸の白い石	泉佐野市	阿萬萬的
病むいたみ知らず白百合むせかえる	和歌山市	福井桂子
真白き足袋はき終えてきりと立つ	堺市	柿花紀美女
亡母の夢見た日の妻の語がはずみ	鳥取市	河村日満
一雨に春の鼓動が鳴っている	香芝町	細川孝典
油断した日から人間転げ落ち	稚内市	池永龍生
天神さん寝ている牛に番をさす	大阪市	内藤ますえ
子を守る母は夜叉とも菩薩とも	稚内市	北村照子
売り上げが減って晩酌ちよつと減り	新宮市	田中国彰
売り上げが落ちて血圧また上る	紀宝町	玉置紀之
乳呑子のくれる笑顔に話しかけ	熊野市	舛屋水仙
さと芋の親子の別れ風さむし	熊野市	西久保福恵
初氷寒さも忘れ指にふれ	熊野市	阿津敏



寺の鐘聞けば絵になる残り柿	熊野市	中村	正治
つかの間の太陽へ急ぐ洗い物	御浜町	桜木	清子
若い頃だけが話になる老夫	熊野市	森村	呂甲
女難の相易者嬉しい嘘をつき	東大阪市	萩尾	真佐志
連れもよし澗八丁の酒うまし	神戸市	増井	不二也
嘘と知る愛情山の灯は遠し	岸和田市	榎本	聰夢
名前まで考え子宝待ちあぐむ	橋本市	田中	恒治
ホームドラマ食事の音は聞かせない	和歌山市	桑原	道男
よう動く妻ほほえんで夫を見	熊野市	徳田	満治
郷の香を包みて届く亥の子餅	新宮市	井上	亀一
平凡に日々過ぐ部屋も冬仕度	新宮市	尾原	義郎
こおろぎが鳴いて読書の秋を知る	大阪市	前川	玉子
表彰状なぜ女房の名を書かぬ	熊野市	鈴木	村諷詩
雲なにを急ぐか砂丘斜に飛び	鳥取市	岡川	洋々
みやげ話する人も無き寡婦の旅	和歌山市	吉野	富江
握手した手が離れないまま坐り	岡山県	浜田	久米雄
笛太鼓店いっばいに獅子入る	新宮市	嶋田	悦子
耳かきが愛を奏でる膝枕	稚内市	東浦	緑堂

謝

長男の喜一から、長女の富子（大輪）の方へ、父の還暦祝いは済んだけど何か記念になる物はないだろうかという電話がかかった。「そうやねエ、句集でもどうか……？」「よっしゃ決めた、そうしよう。」と言う事になり、早速妹とも連絡をとり合って話をまとめ、大輪に相談すれば双手を挙げての大賛成となり、着々と句集、選句に取りかかったようである。そうして選句半ばにしてやつと子供達で私の句集を出して見ようと言い出した。これが句集刊行に際して、私への第一声であった。

私にとって句集上梓等は思いもよらぬ事だった。然し彼等の熱意は不動のものであった。大輪が一手に引き受けている選句、選別の確さにはつくづく感心させられた。この分ならささやか乍らも小句集がまとまるように思えたけれど、喜んで応じるわけにはいかなかった。それには諸先生各位のご指導ご協力、ご高筆を仰がねばな

らないからである。然し彼等もその事については既にお願ひして
いるとの事、何も彼も承知の上だろうが、父の無い無い三拍子から産
み出す句集上梓への苦勞が思いやられた。

今日ここに最後の一頁を括る謝辞を記すに当って、感無量の物が
ある。四カ月にわたって編集に全力を注いでくれた大輪、富子、溪
水の三人に心から謝意を表したい。

本当にありがとう。

当初スタッフの誰がこのような素晴らしい句集の完成を想像した
であろうか。これこそ人、人、人の愛の結晶である。本年は川柳し
んぐう吟社（みかん）創立十二周年に加えて川柳塔社（川柳塔）通
算六十周年という意義ある年に、私も同じくして還暦を迎えました
事を心から嬉しく思っている次第であります。

心を込めた句集をお贈り致します。

句集は読んで貰わねばなりません。句集は読ます句集でなければ
なりません。そのむずかしい句集を刊行致しましたが、西尾棗先生
をはじめ橘高薫風、野村太茂津、高津戸明、正本水客、黒川紫香、
若柳潮花、岩本雀踊子、中根勇太の諸先生各位より、過分なるお言
葉を賜わり、恐縮の極みです。

この温かい友情を幾久しく賜わりません事をお願い致しまして、

お礼の言葉と致します。
ありがとうございます。

幸せがこぼれ落ちそうみかん船

十郎

昭和五十九年五月三十一日

大矢十郎

跋

野
村
太
茂
津

「私の還暦祝いで、子や孫達に赤いチャンチャンコを着せられて写真を撮られたが赤面の到り、昔は赤を着せられて年寄りの仲間入り、今は赤を着せられて若者の仲間入りでしょうか。………いつもなら殆ど毎日のように、太茂津に電話くれる慣わしの十郎さんからのめずらしい手紙である。

「何も彼も委せていると、子供達は何をするか分らないものです。此の度の句集も、良きに計らえ、つてところでしたが、考えてみる。これは大変な事です。諸先輩各位の御指導と後援、手助けアドバイス、どれ一つ欠いてもいけません。」

「然し彼等も二十歳坊主ではありませんから、それなりに頑張っているようです。何卒優しいお目で見守ってやって下さい。」

手紙の冒頭に「遅過ぎた孝は惜しまれるが、孝に早過ぎるは無いなどと偉そうなことを子供達が言つて句集を出してあげようと相談しています。」という書き出しであった。

十郎さんと私の最初の出会いは、〃川柳わかやま〃を始めて間もない頃である。故垂井葵水氏が、新宮に十郎が川柳同好グループを

集めているから応援に行こうというので、同行して句会を開いたその時からである。

紀南の人々の人情は、紀北の人間と異なり、「温い」の一語に尽きる。遠慮げに、部屋の片隅に座っていた。句箋の書き方や、句会の進行方式にも馴れず、柳誌のあることすら知っていなかった。しかし、川柳に対する熱情は、我々以上に熱いものがあり、初対面から惚れこんだ私である。弟が一人出来たという感じで、今に到っている。

長女の富子さんの御主人、川上大輪氏（高校教諭）は体操で怪我をせねば、おそらくオリンピックにも選ばれたであろうというベテランで、初めの雅号は「大車輪」で葵水のアドバイスで「車」を取ったのだが、川柳に頭角を現し、富子夫人と共に両輪の如く、十郎さんを支えている。

ご長男の喜一君（十郎さんには六人の子達、男性はこの一人）は羨ましい限りの親思いで、おそらく句集の費用は喜一君が大部分を負担したのであろう、と思われる。

まさ子夫人の内助は並大抵なことでないと察する。長女富子を頭

に、とよ子、栄子、裕子、の四人を立派に嫁がせ、五女のみち子さんが適齡で控えている。

順々に嫁くそれだけを羨まれ

路郎賞に輝いた通りである。

この子宝たちの力の結集なればこそ、この句集「みかん船」が生まれたのである。還暦の船出を飾るにふさわしい。まさ子夫人に甘え、子宝に甘え、益々「川柳しんぐう」のご発展を祈ると共に、私も全幅の助力を惜しまない。
おめでとう。

子宝を積んで満帆蜜柑船

太茂津

川柳わかやま吟社 主宰

野村冬茂津

解 説

川 上 大 輪

ひとりの人間を一冊の句集にまとめ、その人間像を浮き彫りにすることは容易な事ではない。

私が義父、十郎氏と出会ったのは長女富子との付き合いが始まってからであるが、最初の出会いで彼女の親の趣味を勧められたのは私も驚嘆した。初対面の父親の姿というものは、口数は少なく、どことなく取りつきにくいのが普通であるが、この予想は見事裏切られた。父だけでなく母や妹、家族の雰囲気すべてが、まるで十年の知己に会ったような懐しさや、なごやかさを作り出しているのもやはり父の人柄、人間性がそうさせているのであろう。

大正の末期に生まれ、昭和の動乱、軍国主義一色の世に青春時代を送り、人生の半分を犠牲にし、そして昭和二十一年大陸から引き上げた時、荒廃した日本の姿を誰が想像したであろうか。家屋はもちろんの事、人の心までが荒み、どん底まで墮落している姿を目の当りにした時、父はそこに地獄を見たのである。そしてそこに一つの疑問が湧いたのである。

人間とは何か、人間の本質とは？そして狂乱ともいえるこの時代に自分は何をすべきかを……………。

日頃、詩、短歌、俳句といった短詩文学に興味を持っていた父があえて川柳の世界に飛び込んでいったきっかけである。

同好の士もなく柳誌の所在すら知らぬ父にとって地方紙に載ってくる川柳欄が唯一の寄りどころであった事は確かである。孤軍奮闘を続けながらも世相を厳しく風刺する父の作風の基礎はこの時代に築き上げられたものであろう。

昭和四十四年六月瓦版同人で故浅利太平氏、番傘同人小山峻氏の三人で新宮に片山雲雀先生を迎え時事川柳会を結成した、その後、野村太茂津、故垂井葵水両先生を迎え本格的な川柳の指導を仰いだ時から父の作風は流れを変えていったのである。

川柳は人間である。世相である。総てのものに川柳の心と眼を注げば、如何なる逆境にもめげぬ明るい希望と慈しみの心が芽生えてくる。

これが父の人生修養論である。

父の句には厳しい風刺があり、穿ちがあり、笑いがある。父の句は作り出されたものではなく、すべて生み出された句なのである。

我々大矢ファミリーにとって、父は人生における指標であり、目標なのである。

この一冊の句集にまとめられた父の姿を我々の子供や孫達はどのように受け止めるだろうか。

どのように時代が変わっても人間としての生き方は永遠に変わらぬものであり、少しでもこの句集から何かを学びとってもらいたいと願うばかりである。

遥かなる旅へゆつくり帆を上げる

大輪

発刊に当たつて

父の還暦記念に子供達で何かしようではないか、と話が持ち上がった時、真っ先に句集発刊の案が浮かび上がった。浮かび上がったというよりも父には川柳しかないもので、これ以外には考えられなかったというのが事実である。

話がまとまり父に相談したところ、まだまだ時期早々ではないかという事であったが、句集は子供達からのプレゼントであり、押し切つて発刊に踏み切つた。

句集といつても父の句を広く世に問うといつた、大それた考えは毛頭無い。ただ還暦の祝いとして句集にまとめただけであり、それを孫やその子供の代まで残しておきたいために他ならないからである。

とにかく、何もかも初めての事で当初はあまりにも軽く考えていた感があり、いざ始め

てみるとどのようになれば父の人間性、人柄というものが、いかに鮮明に、浮き彫りにされるだろうか、選句や配列に到るまで容易でない事が判ってきた。句を何度も整理し、編集を繰り返して何とか落ち着いた。まだまだ不備な点が多いが、少しでも父の心に触れ、孫やその子の代まで残すことが出来ればと思っている。

最後にこの句集のため忙しい中、時間を割いて玉稿を賜りました諸先生方には感謝の言葉もございません。心からお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

長女	川上富子
長男	大矢喜一
次女	富岡とよ子
三女	江崎栄子
四女	三浦裕子
五女	大矢みち子

著者柳歴 (本名 大矢十郎)

大正十三年十月七日

和歌山県新宮市で父勝之助、母クマの
六男、十人目の末子として生まれる

昭和二十一年

大陸より復員
各新聞紙等に投句を始める

昭和四十四年

新宮市で片山雲雀氏以下瓦版一行を迎
え時事川柳会を結成

川柳塔・番傘・川柳瓦版に投句をはじ
める

故清水白柳、故垂井葵水両氏に師事

昭和四十七年

野村太茂津、故垂井葵水両氏の推薦を受け川柳塔社同人となる

川柳しんぐう吟社創立、柳誌「みかん」を発行

昭和五十年

川柳塔社第一回各地柳壇賞受賞

川柳塔社理事

昭和五十三年

川柳塔社参事

昭和五十五年

川柳しんぐう吟社みかん賞受賞

昭和五十六年

川柳塔社路郎賞受賞

昭和五十九年

還暦記念句集「みかん船」発行

還暦記念

川柳句集「みかん船」

昭和五十九年七月三十一日印刷
昭和五十九年八月七日発行

著者 大矢十郎

新宮市熊野地一―六一十二
電話0735(22)7676番

印刷 藤原童心社

吹田市天道町六一十五
電話06(388)2377番

発行所 川柳塔社

大阪市阿倍野区三明町二一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室

〈非売品〉



紀伊國

蜜村樂

青樹



